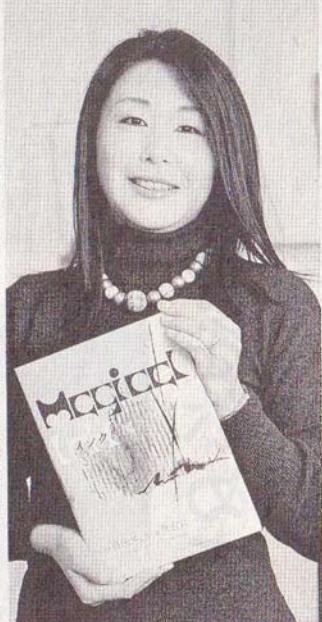


著者に聞く



「絵本なので大人は泣くなない、ちゃんとハッピーホン主角ってます」と
話す金子祥代さん(大阪市内)

(平松正子・文化生活部
('インクの魔法'は幻冬舎ルネ
サンス刊・二九四〇円)

書道の本、など先に言わない方がいいかもしれない。氣鋲の書家・金子祥代さんの初著作「インクの魔法」は、不思議な味わいの短い物語四編と、ホップな墨製作品を収めたアートブック。先入観は一切持たず、まずは手に取ってみほしい。

コンセプトは「墨の絵本」。分厚く堅厚な表紙、つるつるした紙、余白たっぷりの自由な紙面構成は、確かにページをめくると身体のうれしさを思い出させる。「書道展に来れるなんとも一部でも本ならみんな読むでしょう。もつと普通の人書の良さを知つてほしい」と金子さん。

墨の魅力伝えたい

金子 祥代さん

かねこ・さちよ 東京都出身。7歳から書道を始め
る。津田塾大学芸術学部卒。
芦屋書道くらぶ主宰。神戸市在住。

最初の話は表題作「インクの魔法」。奇妙な店で一本の万年筆を手にした日から、「私」の人生が動き出す。二作目「古城の番人」は、城のじゅうたんをめぐる昔の恋物語。三作目「Cage」は、恋人を残して家出した女の、さらやかな冒険譚となっている。

意図したわけではないらしいが、いずれも何かを求める旅する人々のドラマだ。「やはり書くものには自分自身が出てしまった」と金子さん。書道も同じ。会話文が多いのも共通した特徴。「夢の中の登

場人物が話すのを聞き取るように書いた。自分でも思いかけない結果を迎えた話もありますね」。そして最後が「フレンズ」。一人で画廊を営む「マダムM」と若きアーティストの交流を描いた。「ただひつだけ覚悟しなくては…捨てる」と。Mのせりふには、著者自身の芸術觀が込められているといふ。

「Mには実在のモデルがいる。彼女は『commitment』という言葉を使つたのだけれど、これは『献身』といふ意味がある。一つのためにすべてを捨てきけり。書道は生きいく私にとって大事な言葉です」

主人公が書作品。驚くべき鮮烈な印象は、墨色の濃淡と線のリズムによるもので、

一部に金粉を加えただら。イラストと見まつた愛らしい屏絵も自ら彫った篆刻作品で、すべて古来の書道の技法にこだわった。

墨はいつまでもミステリアスで魅有力的な生き物」という金子さん。「まだまだ成長過程にある自分がすべてを出し切って書いた。書と物語の両方合わせて、これが今の『私』です」